われらが父たちの掟

上

スコット・トゥロー
二宮磬[訳]

THE LAWS OF OUR FATHERS

SCOTT TUROW

われらが父たちの罪

江苏工业学院图书馆
藏书章

スコット・トゥロー
二宮 磬[訳]

THE LAWS OF OUR FATHERS
BY SCOTT TUROW
COPYRIGHT © 1996 BY SCOTT TUROW
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH
BRANDT & BRANDT LITERARY AGENTS, INC., NEW YORK
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

われらが父たちの掟　上
一九九七年六月一五日第一刷

著者　スコット・トゥロー
訳者　二宮磬
発行者　新井信
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵102
電話＝〇三―三二六五―一二一一
印刷所　凸版印刷
製本所　加藤製本
万一、落丁乱丁があれば送料当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示してあります。
ISBN4-16-316980-6

レイチェル、ゲイブリエル、イヴに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

われらが父たちの掟　上

装幀　坂田政則

目次

第一部　告発　7

第二部　証言　71（上巻434頁以降下巻に続く）

第三部　判決　（下巻）

主な登場人物

	現在（一九九五―九六）	一九六九―七〇
ソニア（ソニー）・クロンスキー	キンドル郡中央裁判所判事	学生
セス・ワイスマン	コラムニスト	ソニーの恋人
ホビー・タトル	ナイルの弁護人	ナイルのベビーシッター
ロイエル・エドガー	州上院議員	セスの幼馴染
ジューン・エドガー	ロイエルの別れた妻	反体制運動リーダー
ナイル・エドガー	保護観察官　ジューン殺害事件公判被告人	大学神学部教授 ロイエルの妻 エドガー夫妻の息子
ルーシー	セスの妻	
ハードコア（オーデル・トレント）	暴力組織〈T4ローラーズ〉のリーダー　共同被告人	
バグ（ロヴィーニア）	ハードコアの手下	ホビーの恋人
ジャクソン・エアーズ	ハードコアの弁護人	
トミー・モルト	検察官	
ルディー・シン	同右	
マリエッタ・レインズ	裁判所書記官	
バーンハード・ワイスマン	セスの父	

第一部　告発

第二次大戦後に訪れた恵みの時代に生れたわれわれは、自分たちが先の世代のアメリカ人とは異なる人生観を持っていることに気づいている。彼らは必要上、目隠しをさせられ、関わりを――神の栄光への、獲得の喜びへの、はたまた生き残るための卑しい小さな企てへの関わりを――より制限されて成人に達した。だがわれわれは、アメリカの生得の権利にはたんに生命と自由ばかりではなく、幸福の追求が含まれる、とする独立宣言中の約束を真摯に受けとめた。わたし自身、子供のころは、成長することの意味はそこにあると思いつづけていた。だから、いまわたしは当時より幸せであって然るべきである。

そんなわけで、われわれの中年期にはひどく苦い問いかけがつきまとうことになる、夢のなかで、日の出時に、思いがけず孤独感が胸をきりきりと刺す時に、執拗な声が囁きかけてくる……これが約束されているあの幸せなのだろうか？　もうすこし、と望む権利があるのではないか？　それとも、もうこれ以上望むべきものはないのだろうか、と。

――マイケル・フレイン、「生き残った者の道しるべ」、一九九五年九月七日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一九九五年九月七日

ハードコア

夜明け。ここは水のあるところからは何マイルも離れているにもかかわらず、空気は塩分を含んでいる。煉瓦造りの建物、舗装の割れ目から顔を出す雑草、散らばるつぶれたコークのカップとキャンディの包み紙、風に舞う新聞紙、といった殺伐とした風景の真ん中に、四つの高層タワーがぬっとそびえ立つ。砕かれたボトルの破片が地表に掛けた銀のベッドカバーとなってキラキラと輝く――これもまたもう一つのまやかし。いまは一帯には珍しい静かな一時(ひとときま)。夜には、ここに生きる者が立てる激しい物音がしばしばあがる、どなり声、酔っぱらいのわめき声、うなりをあげるエンジン音、そしてときには銃声も。明るくなると人の声が通りに流れ、子供たちや、なにをするでもなくただ突っ立っている大勢の男女をはじめ、雑多な人間が姿を現わす。いま風が起こり、金網フェンスと煉瓦壁に囁きかけて吹き過ぎていく。高層ビルのほうへと歩いている男はなにか動くものの気配を感じて目を上げる。だが建物と建物のあいだに一匹の犬がうずくまっているだけで、まだ百ヤードの距離があるにもかかわらず、犬はすでにその本能でなにかを察し、男とは関わりを持つまいと決めこんでいる。遊び場のひび割れたアスファルト舗装の上に、どう

いうわけか古タイヤが一つ、転がっている。

その男、オーデルはじきに三十六になる。刑務所を出て四年になるが、自身〝ヤワになった〟というとおり、塀のなかにいたころの身体つきをまだどことなく残している。黒いシャツにズボンという簡単な恰好だ。金目のものは身につけていない。「仕事のときは金目のものは持ち歩くな」彼がこのあたりへ顔を出すのはおおかたが午後だが、するとなんだかんだと機嫌をとり結びに寄ってくる、八歳から十歳ぐらいの暴力団予備軍の子供たちに、彼はよくそう言い聞かせている。「ハードコア、朝鮮人（コリア）のとこからココーラ買ってこようか？」連中はよくそう持ちかける、釣り銭は取っておけと言われるのが狙いであることに彼が気づいてでもいないみたいに。

オーデル・トレント、仲間うちの呼び名ハードコアは、今朝は独りだ。彼がいま向かっているグレース・ストリート公営団地（プロジェクト）を構成する四つの高層ビルのうちでいちばん高い建物は、最近はIVタワーで通っている。たぶんローマ数字のIVに因（ちな）んでそう呼ばれるのだろうが、おおかたの人間は、警察の指導を受け、自分たちの住む建物を象牙の塔（アイヴォリー・タワー）と呼ぶ住民たちに対するおなじみの嘲りがその呼称を産んだのではないかと思っている。窓やポーチや連絡通路といった建物の開口部は、頑丈な金網で囲われている。以前には通路とバルコニーからときおりゴミが投げ捨てられたり、中世さながら敵に向かって煉瓦が落とされたりした。酔っぱらいや麻薬でイカれたのが足を踏みはずして転落死したこともある。また、突き落とされたのも何人かいる。三つ四つの窓には、ボヤの痕がまだらに黒く残っているのが見てとれるし、地上に目をやれば、オーデルの手下たちが三色の蛍光塗料の上に黒で書いた〝BSD〟の大きな文字が煉瓦壁に見える。〈黒い聖者の使徒（ブラック・セイント・ディサイプルズ）〉。オーデルの組――組織の一支部で、頭（アタマ）は彼だ――〈T4ローラーズ〉の名もあちこちで敬意を表されている。対立する組織、〈ギャングスター・アウトローズ〉の勇敢なやつが敵地にその名を残してもいる。ところどころには、〝ディロンはクール〟、〝ルシファー〟とい

った、独りよがりの思いつきを黒か白のスプレーで吹きつけてあるのも見かける。
オーデルは建物内に踏み入ると、防弾ガラスを嵌めた小さな窓のある、コンクリート製シェルターのなかでちぢこまっている警備員にうなずきかける。キンドル郡住宅局から送りこまれてきている、チャックという名のずんぐりした男だ。チャックはオーデルから毎月、大きいのの半分――つまりは五十ドル――を受け取っている。チャックはハードコアが好きらしい、見ればいまもちゃんと会釈をしている。入口ホールを照らすものといえば、大きな南京錠をかけたペプシの販売機の光だけだ。電灯のたぐいは一つも残っていない。盗まれて売りとばされたか、暗いところでの商売を好む〈セインツ〉の連中が壊してしまったかで。よじれて束になった裸の電線が壁から垂れている。汚れた通路の発するきつい異臭と壊れた配管のせいで、空気はじっとりと湿っぽい。塗装は古くなり、天井を走るむきだしのパイプには錆と黴が生じている。印象としては一種の掩蔽壕だ――爆撃を逃れるための退避壕といったところか。床はコンクリートで、壁はシンダーブロック。いたるところに――いたるところにだ――暴力団のしるしが描かれている。聖者の円光、〈T4ローラーズ〉を表わす4の上に横棒を引いたマーク、さらには壁の下地の石膏ボードや塗装の上に教材のマーカーで書きつけたり、ライターの火で焼きつけたり――こっちのほうが多い――した、〝Dタウン〟、〝マイク－オー－マイト〟、〝ベビー・フェイス〟、〝プリースト〟といった文字も。
今日はエレベーターの一基がまた動くようになっていて、ハードコアはそれに乗りこんで十七階へ向かう。五階まではいまではほとんど無住状態だ。たとえ一月三十八ドル五十セントの家賃でも、銃弾を避けるためベッドは床につけて置くほかなく、いちばん安全な眠り場所はバスタブのなか、という生活には高すぎる、と考える居住者たちが権利を放棄してしまったからだ。十七階の一室に踏みこむと、住人である中年女が使っている奥の二部屋の一つから、苛酷な暮らしの

せいで凝固してしまったような、しゃがれた寝息が聞こえてくる。

オーデルは表に面した二部屋を自分のものにしている。そこに陣どってながめる。ここまで上がると〝事業〟の全体が観察できる。ときどき警察が――〝ティックタック〟、キンドル郡警察の特捜班のことを〈セインツ〉はそう呼んでいる――下で張りこみをする。大半はオーデルの金を受け取らない連中だが、受け取るやつも何人かはいる。警察が首をひねっているのをオーデルは知っている。あのニガーはなんでこうオツに澄ましてやがる、おれたちが現われると、きまって動きがピタリととまってしまうのはどういうわけだ、と。オーデルは見ているからだ。いまいるここから。彼はメンバーのなかでは最年少のガキども――〝偵察隊（ピーパーズ）〟と連中は自称しているが――をうろつかせ、嗅ぎまわらせている。警官であれ、おまわりまがいの警備員であれ、麻薬取締局のくたびれた捜査官であれ、そうした厄介者が一人でもこのタワー区画へはいりこめば、ハードコアにはちゃんとわかるのだ。目の下の通りの先の四つ角に三階建てのアパートメントが二軒あり、チビどもがそこの階段に毎日陣どって、やってくる車の相手をする。車はロック、ボトル、クランクと呼ばれるコカインやアンフェタミンを運んでくる。ときにはマリファナも。BSDでは古株のトップランクの連中が、毎週二オンスをこの街の顔見知り相手にさばく。きっちり締めて余計な稼ぎはさせない、いつも困らせておく。オーデル自身はちがう。住まいは何軒もあり、女は何人もいる。車はブレイザーと粋なBMW755を持っている。そう、富を手に入れた、だが、いつも実入りがいいのはこいつのおかげ、ここでやっていることのおかげなのだ――ブツに混ぜものをするのが仕事の〝DJ〟や、取引相手に渡りをつけ、見返りに現物支給を受ける〝変換器（スクランブラー）〟や、日に二度、ガレージやアパートメントに貯えてある品物を動かすための〝騾馬（ミュール）〟や、彼の立場を狙う者が現われないよう、銃でにらみをきかせるのが役目のハンチョーとゴルゴという凶悪な二人組から成る〝砲兵隊（アーティラリー）〟をうまく操っているからだ。七十五人、ときには百人、

それだけの人間をハードコアは監督下に置いている……連中には常に教訓を叩きこむ、密告屋にしてやられるな、おとり捜査にひっかかるな、指輪や金製品では取引きするな、キャッシュに限れ、わかったな！　毎日なにかしら問題は起きる、だが彼としてはなんとしてもこの状態を維持したい。

いま、時刻は六時をわずかにまわったところ。ポケットベルが鳴りだし、腰に震動が伝わってくる。ハードコアは悪態をつき、リードアウトに目をやる……ナイルだ。また泣きごと。「もう手遅れだぜ」と、自分に言い聞かせる。その声で女のしゃがれた寝息が一瞬やむ。たぶんもう目はさめただろう、白髪（しらが）の頭に手をやり、早く出ていってくれと願いながら、鼻を鳴らしたり、咳ばらいをしたりして聞き耳を立てているのだ。表の二部屋にはなにもない。椅子二つだけ。ほかには古新聞。コンクリートの床は早朝の光で鈍い黄色に染まっている。敷物はとっくに盗まれて、ない。

ここは奥で寝ている女の住まいで、彼女はここで三人の子供を育てたが、息子はいまラドヤードの州刑務所にいる、いや息子二人ともだ、とオーデルは思い出す、娘のほうも唯一の売りものを街角で売っているコカインでイカれた牝犬（ビッチ）だ。息子二人はムショでイエスと出合ってだめになり、ＢＳＤを脱けた。だからオーデルはここへ乗りこんできた。女はしたたかだった。「やんなよ、あたしを撃ち殺しなよ、なんなりと好きなようにすりゃあいい、あたしは出ていかないよ、ここはあたしの家だ、あたしの家をクソッタレのチンピラどもに渡すもんか」

二人いるＢＳＤの頭（アタマ）の一人、副頭領（ヴァイス・ロード）と呼ばれているＴロックがハードコアに向かってずばりと言った。「言うとおりにしちまえよ、困った目にあわせてやろうじゃないか」ハードコアは組のために働いてきた、ＢＳＤのためならなんでもやった、セイントのなかのセイントであろうとしてきた。だが、もう若くもない女にあこぎな真似はしたくなかった。だから女はここにいさせ

ておくことにした。
「それに、ヤクの売り買いも、売春も、とにかく暴力団が商売にすることはここじゃいっさいお断わりよ」
「なんにもしやしねえよ」と、彼は女に言って聞かせた。
「へえ、そう」と、女は応えた。
女はまた眠っている。ちょうどそのとき、伝えておいた時刻六時十五分ぴったりに、車がやってくるのが、百年まえのおんぼろシェヴィーが目の下の通りの角をまわってくるのが見える。さて、とオーデルは自分に言い聞かせる。いよいよちょいとした荒療治にとりかかるか。双眼鏡を持ってきているが、このままでも充分によく見える。バグが携帯電話をジャケットのポケットにしまって車に近づく。そしてまた後退してすこし離れる、手順どおりに。オーデルのポケットの携帯電話がくぐもった音で鳴りだす。
「なんだ」と、彼は応じる。「〝T〟か、おい？」
「テン－ツー」と、ロヴィーニアから返ってくる。彼らのあいだでは適当にでっちあげた無線コードを使っており、ティックタックの連中はそれでカリカリきている。〝テン－ツー〟はトラブル発生の意味だ。助けが要る。「聞こえた？」いかにもロヴィーニアだ。相手に気をつかうなんてことはこれっぽっちも知らないときてる。
「そこを離れろ、ばかめ、聞こえてるよ。いったいどこが10－2だ」広々としたグレース・ストリートにはなんの動きもない、ほかに車は見えない、すっ飛ばしていく白人の車もない。歩いているやつさえいない。「なーんにも見えねえぞ。なにを突っ立ってるんだ、ばか、とっととそこから逃げ出せ、さあ」
「見えっこないのよ、あんたのとこからじゃ。それにこの電話じゃこれ以上話せないの。テン－

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com